

2013年10月8日

ワールド・モニュメント財団、「2014年文化遺産ウォッチ」を発表
世界 41 カ国／地域の 67 件、日本からは東日本大震災被災文化遺産を含め 2 件が選定

- ◆ 国や文化の枠を超え、歴史的建造物などの文化遺産の保護・保存活動を行っているワールド・モニュメント財団（World Monuments Fund: WMF/ 設立 1965 年、本部：ニューヨーク、理事長：ボニー・バーナム）は、2013 年 10 月 8 日（米国ニューヨーク現地時間）、愛媛県大洲市に所在する「少彦名神社参籠殿」とともに、「東日本大震災被災文化財」（前回 2012 年に引き続き再選）を 2014 年版「ワールド・モニュメント・ウォッチ（World Monuments Watch：以下「文化遺産ウォッチ」と称す）」に選び、“緊急に保存・修復などの措置が求められている文化遺産”として、広く世界に向けて、その現状と復旧支援の必要性を訴えると発表しました。この 2014 年版「文化遺産ウォッチ」に選定された文化遺産は、日本を含む 41 カ国/地域に所在する 67 件に及びます。
- ◆ 日本から選ばれた、「少彦名神社参籠殿」は、四国、愛媛県大洲市（菅田町大竹）に所在する、京都清水寺の舞台に見られる「懸け造り」様式の昭和初期の木造建造物です。参籠殿は、少彦名命の終焉の地、現在の大洲市中央を流れる肱川、の南岸に位置する梁瀬山の中腹、少彦名神社境内の急斜面に、その大部分（約 93%）が空中楼阁の如く溪谷に張り出すように持ち出されている建物です（中野文俊設計）。また、少彦名命は、おとぎ話の一寸法師のモデル、そして道後温泉の開祖、また薬の神様で知られています。（選定の理由等詳細は別添資料参照）
- ◆ また、「東日本大震災被災文化財」は、前回 2012 年に引き続き、特定の文化遺産でなく、主に東北、関東などの被災地域にある被災文化遺産を対象として、再度選定されました。WMF は前回の選定結果を受け、文化庁や日本国内の文化財保護活動を行う各非営利組織・団体と協働し、千葉県香取市佐原と宮城県気仙沼市で被災した歴史的建造物の修復活動に取り組んでおり、現在、宮城県石巻市に所在する天雄寺観音堂（江戸期の建物で市指定文化財）など、新たな被災文化遺産を復旧対象として国内パートナーとともに調査・検討中です。（選定の理由等詳細は別添資料参照）
- ◆ 今回選定された文化遺産には、ユネスコ世界遺産でもあるイタリアの「ヴェネツィアとその潟」（ピークシーズンには一日 20 万人の観光客が訪れるなど、その数は過去 5 年間で 4 倍。特に大型クルーズによる観光で、環境問題、市民生活への影響が深刻）、や内戦が続くシリア全土の文化遺産（ユネスコ世界遺産の古都アレッポなどを含む）が含まれるなど、自然災害、都市開発、維持管理不備以外で危機にさらされているとこ

ろが多く含まれ、文化遺産を取り巻く環境が更に厳しくなっていることが、世界的に判ります。(選定文化遺産詳細：<http://www.wmf.org/watch> 英文)

- ◆ 「文化遺産ウォッチ」は WMF が 1996 年より隔年で、“緊急に保存・修復などの措置が求められている文化遺産”を世界中からの申請を得て、選考しリストとしてまとめ、広く配信し保護活動の必要性を訴えるというプログラムで、今回が 10 回目となります。今回を含め、このプログラムで選定された文化遺産は 133 カ国／地域に所在する 740 以上に及びます。また、このプログラムの設立スポンサーであるアメリカン・エクスプレス財団の支援 (150 カ所以上の選定文化遺産に今まで 1,500 万ドル) を含め、今日までの選定文化遺産支援には、WMF よりの直接助成 9,000 万ドルの他に、約 2 億ドルの助成が、このプログラムを通じて、直接 (WMF を通さず) なされております。

この件に関するお問合せは：ワールド・モニュメント財団 稲垣光彦

電話：080-6726-1308 e-mail: minagaki.culture@gmail.com

添付資料: <日本の選定文化遺産に関して>

I. 少彦名神社参籠殿

- ▶ 日本各地に残る約 100 カ所の懸け造りが主に明治時代以前に建てられている中で、参籠殿は昭和初期（昭和 9 年<1934 年>設計、竣工）と、懸け造り様式の近代建築として希少な例である。また床下の掛け部分の高さは 8.3 メートルという驚きの高さで、その規模は四国に残る 3 カ所の懸け造り建築のなかでも最大であり、一方使用部材は細く美しい景観を提示している。

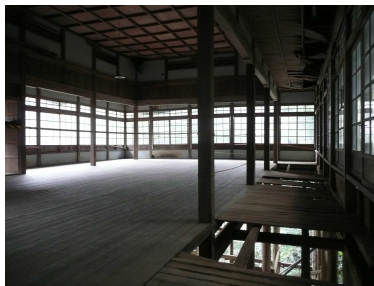


また、建築意匠には、懸け造りという伝統工法に加え、近代建築の手法であるキングポストトラスの小屋組み（写真：右上）、筋交い、前面ガラス窓の透明感溢れるデザインが取り入れられている。そのことにより、往々にして「一人籠る（参籠）」という暗いイメージは払拭され、永く地域住民の祈願場所として、そして宗教施設というよりは、地域の集会場所として、日々の生活流れのなかで地域社会の連帯感を形成する機能を果たすことに繋がってきている。この意味で参籠殿は、地域社会との不可分な関係を維持・継承していく文化遺産として貴重である。

- ▶ また、建築意匠には、懸け造りという伝統工法に加え、近代建築の手法であるキングポストトラスの小屋組み（写真：右上）、筋交い、前面ガラス窓の透明感溢れるデザインが取り入れられている。そのことにより、往々にして「一人籠る（参籠）」という暗いイメージは払拭され、永く地域住民の祈願場所として、そして宗教施設というよりは、地域の集会場所として、日々の生活流れのなかで地域社会の連帯感を形成する機能を果たすことに繋がってきている。この意味で参籠殿は、地域社会との不可分な関係を維持・継承していく文化遺産として貴重である。



- ▶ 一方、参籠殿を含め多くの建造物から成っていた少名彦神社は、昭和初期の大洲の繁栄期を境に、その後の長引く経済不況などの影響で老朽化が進んだ。2003 年までには神主が不在、信徒も離れるなど、その荒廃が進むなかで、再考を願う有志達により「おすくな社中」（2002 年）が結成され、参籠殿をはじめ周辺の整備や修理が始まった。そして、2012 年に社中を母体とし、県内外の研究者や建築家を交えた「少名彦神社参籠殿修復実行委員会」が結成されるに至った。地域社会一体となった修復・保存活動が動き出した今、支援を広く呼び掛ける必要性は高い。



- ▶ 参籠殿が建てられた昭和初期の伝統的木造建築では、まず木材を周辺の山林から大工職人と、山林所有者及び^{そまびと}杣人（木の伐採、運搬など）の協力で適材が見極められ搬出されていた。現在ではその協働組織もなく経験者もいない。参籠殿修復は失われた生産体制を再現するなど、山林と建築が一体となっていた時代を明らかにする貴重な経験でもあり、参籠殿に留まらず他の文化遺産保存に与える影響も期待される。

<日本の選定文化遺産に関して>

II. 「東日本大震災被災文化財」

- 「東日本大震災被災文化財」(特定の文化財でなく、主に東北、関東などの被災地域にある被災文化財として広義に選定したもの):平成23年3月11日の大地震及び津波は東日本の広範な地域に大きな被害をもたらし、多くの尊い命が失われました。また、人々の心の拠り所となる文化遺産にも、大きな被害が及びました。国の文化財保護法によって保護されている文化財に限っても700件以上が被災しました。神事や祭事など、伝統的行事として継承されてきた数多くの無形の文化財も、伝統的な職人技とともにその存続が危ぶまれています。被災した地域社会の復興とともに、そこに根ざしてきた文化基盤を復興するための支援は、災害から2年半を経過した現在も、強く求められており、今回の再選に至りました。また、今回の申請は、津波により大きな被害を受けた気仙沼内湾地区の歴史的建造物6件の復旧プロジェクトを進めている非営利団体「気仙沼風待ち復興検討会」によるものです。
- 有形、無形に限らず、文化遺産は日々の暮らしに織り込まれ、永い間地域社会に継承されてきた“心の拠り所”と言えます。漸く都市計画、地盤整備などの復興に向けての動きが見え始めてきている今日、その身近な文化遺産を復旧することは必ずや各地域の復興に繋がるはずです。気仙沼、佐原などを含め被災文化遺産復旧が始まった各地ではそのような地域の活性化の兆しも見え始めてきております。このような動きを更に進めるためにも、無形伝統芸能などの復興が進み、都市整備事業計画も進みつつある宮城県石巻市に所在する天雄寺観音堂などの調査を進め、緊急に支援を必要とする東日本被災文化財復旧に向け、国際協調を官民協働で更に強化していきたく思います。

天雄寺観音堂:天雄寺は、開山が1456~1459年頃(室町時代)で、本堂、庫裏、山門、観音堂などを有していた。雄勝湾が深く入りこんだ平地にある雄勝町の中心部に面し、山の中腹に位置していたそれら江戸時代の建造物は、2011年3月11日の津波により、観音堂(唯一の市指定文化財)を残し流失した。観音堂は1766年(江戸時代)の建物で、毎年の花まつり(御釈迦様の誕生日)やお正月の御開帳など、多くの地域住民に親しまれてきたが、津波により屋根部分を残し損壊。しかし、囲まれていた木立により、損壊部分は流失を免れ、最近の調査により殆ど部材を再利用して再建が可能と判った。現在、市、天雄寺、檀家を始め、地域一体となって観音堂修復活動が始まろうとしている。



(上:被災前)



(右:被災後)

多くの地域住民に親しまれてきたが、津波により屋根部分を残し損壊。しかし、囲まれていた木立により、損壊部分は流失を免れ、最近の調査により殆ど部材を再利用して再建が可能と判った。現在、市、天雄寺、檀家を始め、地域一体となって観音堂修復活動が始まろうとしている。